

宋代における穀物の粗色と細色について

小野寺郁夫

幸 徹

唐代における穀物は、粟を基本とし、その他に雑種・雑色・雑穀等があった。また穀物間の換算には、比率を立てる場合と時價による場合とが存在していた。比率については、量において、粟一〇に對して粟米六が用いられ、「九章算術」や「居延漢簡」等に見られるものと同様である外、開元二五年（七三七年）に、粟一〇・稻穀一五・糙米七が得られる。それ以外については明かでない。

それでは宋代における穀物は如何に取扱われていたか。大略次の二點について考察した所を述べてみたい。第一に、宋代の穀物は主として粗色（雑色・賤色）と細色に大別され、前者は粟・大麥・蕎麥・黑豆・麻穀等から成り、後者は粳米・小麥から成っていた。そしてその區別は、租税の徴收、穀物の買上げ、その運搬・貯藏、更に賑貸、捕蝗の代償、官僚の俸給と、穀物を周る様々な事象に見出される。

第二に、粗色と細色を換算するには、一定の比率が立てられていた。その比率は倉式（倉式例とか倉例として用いられる）に定められていて、量において粗色一〇に對して細色六であった。

以上によつて、宋代における穀物の取扱いが唐代に比べて一層整備されて來ており、粟は粗色に組入れられ、細色の有用性が増大していることを知ることができる。

北宋時代の官賣法下末鹽鈔の京師現錢發行法について

唐末以來の北方民族「契丹」對漢民族の抗争關係は、宋初の「澶淵の盟」によつて收束されたが、軍事力を背景とする和平という國際關係上、北宋は遂に北宋末に至るまで、北方國境地域に數十萬人の軍隊を配備する體制を續けなければならなかった。これに西北方民族「党項」の興起が加わると、百萬人近い軍隊を配備し續けることとなる。

此の數十百萬人の軍隊の補給には年間一千萬貫を超える經費を要するが、その總べてを北方地域州縣のみで負擔することは出來ぬから、相當額の中央財政による負擔が必要となる。此の中央負擔分國境警備費は、對契丹方面分だけでも年間三・四百萬貫に達するが、その負擔分は現錢乃至は物資として國境地域にまで運送されるわけではなく、國境地域の軍需食糧の納入に動く商人の持參する「糧草交鈔」に對する支拂として、都開封府で支拂われることとなつていた。このような中央財政による糧草交鈔への支拂は、宋初には茶鹽香藥などの物資交鈔によつて行われていたが、略五十年を経た仁宗天聖年間になると、京師現錢によつて行うことが可能となつた。

商人に對する現錢支拂は財政支拂の良法である。何故糧草交鈔に對する京師現錢支拂が財政的に可能となつて來たのか。京師現錢收入と現錢支拂との均衡の成立の事情や、對西夏勦勃發による京師現錢收支均衝策の停止とその後の再建の問題などを考察し、併せて照